

日本国内のホロコースト関連博物館

伊藤 慎二

1. ホロコースト (Holocaust) 関連博物館と日本

第二次世界大戦期のドイツ・ナチス政権（第三帝国）が行った約600万人ものユダヤ人の組織的大量殺戮＝ホロコースト（芝 2008, 石川・高橋訳 1996, 望月・原田・井上訳 1997）は、20世紀の人類史上もっとも陰惨な戦争犯罪の一つである。そしてホロコーストは、単に過去の歴史的出来事ではなく、差別扇動表現（hate speech）や同調圧力と「先回り服従」（*vorausseilender Gehorsam*）、さらには「歴史修正主義」（*historical revisionism*＝歴史否認主義：*historical negationism*）のような21世紀の現代社会に横行する深刻な問題にも根深くつながっている。

イスラエルのヤド＝ヴァシェム（*יָד וָשֵׁמ* : *Yad Vashem*）やドイツのベルリン＝ユダヤ博物館（*Jüdisches Museum Berlin*）、アメリカのホロコースト記念館（*The United States Holocaust Memorial Museum*）などのように、ホロコーストに直接関連する国々やユダヤ系市民が多く暮らす地域では、ホロコースト関連の歴史や遺跡・人物を展示の主対象とする博物館が多く存在する。しかし、ユダヤ系市民の人口が非常に少ない日本でも、比較的多くのホロコースト関連博物館が知られる。その内の代表例の全般的特徴については、国外の主要なホロコースト関連博物館とともに紹介する案内書（石黒・岡 2016）がすでに刊行されている。

そこで小論では、現在国内にあるすべてのホロコースト関連博物館の現地見学調査を基に各館の概要を紹介し、その設立経緯と展示特色を博物館学的観点から検討し、現代日本社会における存在意義を考察する。

表1 ホロコースト関連博物館基礎情報一覧

※2019年12月現在

番号	名称	所在地	電話番号	休館日 (年未年始除く)	料金 (大人)
1	アウシュヴィッツ平和博物館	〒961-0835 福島県白河市白坂三輪台245	0248-28-2108	火・水・ 冬季(2月)	500円
2	杉原千畝 Sempo Museum	〒104-0028 東京都中央区八重洲2-7-9 相模ビル2階	03-6265-1808	月・火 (祝日の場合閉館)	500円
3	杉原千畝記念館	〒505-0301 岐阜県加茂郡八百津町八百津1071	0574-43-2460	月(祝休日の場合 翌日)	300円
4	人道の港敦賀ムゼウム	〒914-0072 福井県敦賀市金ヶ崎町44-1	0770-37-1035	無休	100円
5	アンネ・フランク資料館 (聖イエス会アンネのパラの教会)	〒662-0017 兵庫県西宮市甲陽園西山町4-7	0798-74-5911	(原則土のみ開 館・事前予約制)	無料
6	ホロコースト記念館	〒720-0004 広島県福山市御幸町中津原815	084-955-8001	日・月・祝祭日	無料
7	聖コルベ記念館聖者コルベ師 資料室	〒850-0012 長崎県長崎市本河内2-2-1	095-824-2075	無休	無料
8	聖コルベ館聖コルベ記念室	〒850-0931 長崎県長崎市南山手町2-6	095-821-8081	無休	100円

2. ホロコースト関連博物館の分類

現在、日本国内でホロコースト関連の歴史や人物を主題とする展示を常設する博物館は、表1にまとめたように九州から東北地方まで、合計8館存在する。それらは、(1)ホロコースト全般を概観する展示を主とする例、(2)ホロコースト関連の犠牲者であるアンネ＝フランク(Annelies „Anne“ Marie Frank: 1929年生-1945年没)やアウシュヴィッツ第1収容所で犠牲となったマクシミリアン＝マリア＝コルベ神父(Maksymilian Maria Kolbe: 1894年生-1941年没)を追憶する展示を主とする例、(3)ホロコーストの危機から逃れるユダヤ人を個人としての人道精神に基づいて救出した外交官杉原千畝(1900年生-1986年没)を顕彰する展示を主とする例の3種類に区別できる。

3. 各博物館の概要

(1) ホロコースト全般関連

a. アウシュヴィッツ平和博物館（福島県白河市） 図1

JR 線東北本線白坂駅より徒歩5分ほどの住宅地に隣接した丘の上にある。博物館の中心建築は、茨城県玉里村にあった江戸時代中期の古民家建築を移築改装したものである。木造2階建ての建物1階部分が山荘風の内装の中心的な展示室となっている。そして、隣接するレンガ外壁の平屋独立建物のアンネ・フランクギャラリーと、アウシュヴィッツ Auschwitz 第2（ビルケナウ Birkenau）収容所のユダヤ人運搬貨車を意識したJR 提供貨車を再活用した「子どもの目に映った戦争」絵画の展示室から構成される。なお、敷地内には、2011年3月の福島第一原発事故に関する原発災害情報センターも別棟で併設されている。



図1a アウシュヴィッツ平和博物館本館



図1b 同展示室



図1c 同展示室



図1d 同アンネ・フランクギャラリー

主な展示資料としては、ポーランド国立アウシュヴィッツ＝ビルケナウ博物館提供の同収容所の犠牲者遺品（トランク・食器・櫛・手鏡・囚人服・遺灰など）、記録写真・絵画写真である。そして、創設者の青木進々^{しんしん}氏の活動と開館までの道のり^り、アウシュヴィッツ収容所の概要、ホロコーストの危機に直面したユダヤ人に寄り添い救援活動などを行った人々について、詳細な解説がパネル展示によって行われている。

設立の経緯と現在までの活動の意義については、栗山究・萩原達也の報告（栗山・萩原 2016）が詳しい。創設者で当時グラフィックデザイナーであった青木進々氏のポーランド滞在体験がきっかけとなり、ナチス占領下のポーランドやアウシュヴィッツ収容所関連の書籍を出版するグリーンピース出版会が設立された。そして、『『子どもの目に映った戦争』原画展』（青木・鈴木訳 1985）、「心に刻むアウシュヴィッツ展」（青木編 1996）、「レスキューーズ（救済者たち）展」（我妻抄訳 2001）の3つの全国巡回展が多数回開催された。その成果と反響を基に、次世代に戦争の惨禍を語り継ぐ「市民による手づくりのミュージアム」を目指して、2000年に栃木県塩谷町に常設展示施設「アウシュヴィッツ平和博物館（いのちと平和の博物館）」の開館に結実した。そして、2003年4月に福島県白河市に移転し、現在に至っている。学校教育との連携や、2004年～2013年のアウシュヴィッツ収容所解放記念日（1月27日）に敷地内で手作りの氷製キャンドルを点灯し平和を祈念する行事を公開するなどを経て、地域との連携を広く深めてきた。2011年の東日本大震災を契機に、住民生活に根ざした地域に生きる平和博物館実践の一環として、地域の切実な課題に向き合う原発災害情報センターを2013年6月に新規に併設するに至った。

館独自の出版物としては、ニュースレター『imagine』などがある。

b. ホロコースト記念館（広島県福山市） 図2

JR 福塩線横尾駅より徒歩20分ほどの住宅地内の高屋川に面した一面にある。前面がガラス張りの開放感のある2階建ての現代建築で、1階は受付・ホール・子どもの学習室・図書室などを備え、2階は主展示室を中心にアンネ＝フ



図2a ホロコースト記念館



図2b 同展示室



図2c 同展示室



図2d 同展示室

ランク展示室・ホロコーストの犠牲となった子供たちの記念室・杉原千畝展示室などから構成されている。アンネ＝フランク展示室内には、オランダのアムステルダム隠れ家にあったアンネの部屋が再現されている。限られた空間のなかで、異なる主題の展示室の配置構成を巧みな動線と印象的な導入展示によって結び、子供から大人までの各世代の関心に対応した展示となっている。また、敷地内には、1955年にベルギーで生み出された「アンネ＝フランクの形見」のバラやアムステルダムの隠れ家ゆかりのマロニエを植栽した園庭が整備されている。

主な展示資料としては、アンネ＝フランクの父オットー＝フランク（Otto Heinrich „Pim“ Frank）家提供のアウシュヴィッツ収容期の所持品などフランク家ゆかりの物品をはじめ、ナチスにより毀損された旧約聖書、紙幣や食料引換券のようなゲットー内生活関連品など、ホロコースト生還者より提供されたユ

ダヤ人迫害・収容所関連の多種多様な歴史的資料・遺品や美術作品である。日本国内で現在もっとも数多くのホロコースト関連の貴重な実物資料を常設展示する博物館である。

当館の豊富な展示資料は、設立経緯と深く関連する。そのきっかけは、聖イエス会の「しのめ（黎明）合唱団」が、イスラエルへの訪問旅行中の1971年4月にネタニヤのレストランでアンネ＝フランクの父otto＝フランク氏と偶然出会ったことにもとめられる。この出会いがきっかけとなり、ホロコースト記念館と後述の兵庫県聖イエス会アンネのバラの教会の設立へとつながった（高橋編 2002）。その合唱団員であった大塚信^{まこと}牧師はやがて広島県福山市の聖イエス会御幸教会に赴任し、1993年に教会でアンネ＝フランク写真展を開催し大きな反響を得た。そこで、大塚牧師は、教会敷地内にホロコーストの記憶を伝える教育センターの建設を決意し、世界各地に資料提供協力を求めた結果、リトアニアでのホロコースト関係品や、フランク家が所蔵していたホロコースト当時を含む物品の寄贈を受けた。そして、最初のホロコースト記念館（教育センター）が、御幸教会敷地内に1995年6月に創設された（大塚 2002）。さらにその後、御幸教会から約300m離れた現在地に、独立した新記念館を2007年10月に開館し現在に至っている。

現在、学校教育との積極的な提携が行われ、また1997年以来子どもボランティア・グループが新聞編集・アンネのバラの育成・ビデオ編集・ガイドボランティアなどの活動を行っている。

館独自の出版物としては、『ホロコースト記念館ガイドブック』（大塚編 2013）など多数ある²⁾。

(2) ホロコースト犠牲者関連

a. 聖イエス会アンネのバラの教会アンネ・フランク資料館（兵庫県西宮市） 図3

阪急甲陽線甲陽園駅から徒歩10分ほどの小高い丘に広がる住宅地一画の教会内にある。教会前庭が、「アンネ＝フランクの形見」のバラ園となっていることが特色である。教会2階のアンネの隠れ家屋根裏をイメージした礼拝堂とそ



図3a アンネ・フランク資料館



図3b 同展示室



図3c 同展示室



図3d バラ園

の前室部分などが展示室となっている。そのため、教会行事等に影響のない土曜日に事前予約制でガイド付きの公開となっている。展示室では、布製の掛軸（バナー）型の解説展示により、オランダ時代の生活、隠れ家生活、収容所での最期など、アンネの生涯が展示ケース内の関連資料とともに詳しく紹介される。また、オットー＝フランク氏や杉原千畝などについても解説展示されている。

主な展示資料としては、アンネ＝フランクの父オットー＝フランク氏より提供された銀製スプーン・切手入れ・靴ベラなどのアンネ＝フランクの遺品やアンネの写真、オットー＝フランク氏の遺品、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所の焼却炉のレンガやチクロン B の空き缶、アンネの日記の初版本、アンネの隠れ家の模型などである。

教会と資料館の開設に至る経緯は、『アンネ・フランクのバラ：アンネの意

思を受け継いだ人びと』(高橋編 2002)が詳しい。1971年4月に、イスラエル・ネタニヤのレストランで、訪問旅行中の聖イエス会の「しのめ(黎明)合唱団」が、同じく旅行中のアンネ＝フランクの父オットー＝フランク氏と偶然出会い、その後続く交流がはじまった。そして、1972年12月に、オットー＝フランク氏より「アンネ＝フランクの形見」のバラが送り届けられた。これらの経過を経て、聖イエス会の創立者である大槻武二牧師がアンネのバラの教会建設を1978年に発案し、オットー＝フランク氏の賛同協力も得て、アンネ生誕50周年を記念して1980年4月に本教会と資料館が完成した。

館独自の出版物としては、写真集『アンネのバラ』などがある。

b. 聖コルベ記念館聖者コルベ師資料室(長崎県長崎市) 図4

市電蛍茶屋停留場から徒歩15分ほどの彦山中腹の斜面に広がる、カトリック聖母の騎士修道院・本河内教会などの敷地内の一画にある。聖母の騎士修道院内の独立建物である聖コルベ志願院付設建物1階が聖コルベ記念館(聖者コルベ師資料室)となっている。最大の特徴は、円形の展示室中央に実際の旧材を再利用して再現されたマクシミリアン＝マリア＝コルベ神父の部屋(聖コルベの部屋)である。小屋組みの再現部屋内に、長崎滞在中に神父が使用した作業机の実物が安置されている。そして、その外側周囲を取り巻く壁側に、長崎滞在期のコルベ神父の布教活動、ポーランド帰国後のアウシュヴィッツ第1収容所での身代わり餓死刑による殉教(1941年8月14日)、戦後の列福式(1971年10月)と列聖式(1982年10月)などについて、展示ケース内の関連資料と解説



図4a 聖コルベ記念館



図4b 同展示室

パネルによる展示が行われている。

主な展示資料としては、コルベ神父の自筆原稿・手紙・日記帳、コルベ神父が長崎で刊行した『無原罪の聖母の騎士』誌、印刷工場関連の紙折機など、コルベ神父の胸部疾患レントゲン写真、ポーランド帰国後着用帽子、ゆかりのマリア像、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所の焼却炉のレンガ片と遺骨片、コルベ神父が身代わりとなり命を救ったフランチシェク＝ガヨヴィニチュク (Franciszek Gajowniczek) 元ポーランド軍軍曹の手紙などである。

なお、コルベ神父とともに長崎などで布教にあたったポーランド出身のゼノ＝ゼブロフスキー (Zenon Żebrowski) 修道士などに関する資料展示も併設されている。

コルベ神父は、1930 (昭和5) 年から1936 (昭和11) 年まで長崎に滞在し、1931 (昭和6) 年5月に聖母の騎士修道院を現在地に移転し、ここを拠点に布教活動に従事した (小崎 1988)。その経緯を基に、本記念館は1986年に開館した。

c. 聖コルベ館聖コルベ記念室 (長崎県長崎市) 図5

市電大浦天主堂下停留場から徒歩3分ほどの、大浦天主堂正面参道坂道途中の路地奥にある記念品・土産物店1階の奥が展示室である。展示室中央に赤レンガの暖炉があることが特徴である。長崎市の「南山手伝統的建造物群」にも登録されているこの暖炉こそが、マクシミリアン＝マリア＝コルベ神父ゆかりの遺構で



図5a 聖コルベ館



図5b 同展示室

あり、展示室の展示の中心である。暖炉の周囲には、アウシュヴィッツ第1収容所でのコルベ神父と餓死刑による殉教へ至る経緯などがパネル展示で解説され、展示ケース内で関連写真や出版物資料などの展示が行われている。

コルベ神父は、1930（昭和5）年から長崎での布教活動を開始し、その最初の拠点をおいたのが、この場所にあった木造の洋館旧雨森病院であった。そして、1930（昭和5）年5月～1931（昭和6）年5月にかけて、この場所に設立された「聖母の騎士信心会」日本支部で、現在地の聖母の騎士修道院へ移転するまで、「聖母の騎士」誌の出版作業が行われた。その後、洋館は火災で焼失し、残ったレンガ積みの暖炉を所有者の高山雄太郎氏が保存していたが、1981年に取材のため現地を訪れた小説家の遠藤周作氏もその重要性を説いた。そして、1994年のコルベ神父生誕100周年を記念し、この場所に記念室を開設する構想が具体化し、聖母の騎士社の協力などにより寄付金が集められ、コルベ神父の殉教日である1995年8月14日に開館した。

(3) 杉原千畝関連

a. 杉原千畝 Sempo Museum（東京都中央区） 図6

JR 東京駅八重洲南口から徒歩5分ほどのオフィスビル相模ビル2階の一室にある。展示室内では、

杉原千畝の経歴やリトアニア・カウナスの領事館での日本通過ビザ「命のビザ」発給（1940年）に至る経緯と背景がパネル展示と展示ケース内の関連資料により解説されている。杉原千畝の遺品類を常設展示するほぼ国内唯



図6a Sempo Museum



図6b 同展示室入口

一の博物館である。また、「ミュージカル SEMPO」に関する展示や、「命のビザ」にちなんだ来館記念スタンプコーナーも設置されている。

主な展示資料としては、杉原千畝の晩年の手記、「命のビザ」が発給されたパスポート、イスラエル・ポーランドなどから贈与されたメダルや勲章類である。

当館は、杉原千畝夫人の杉原幸子氏が初代理事長となって設立された特定非営利活動法人「杉原千畝命のビザ」（杉原千弘理事長）が主体となり、ミュージカル SEMPO（川崎登代表）の協力により、杉原千畝の人道博愛主義を継承し、「命の大切さ」・「平和の尊さ」を広めることなどを目的として、2019年3月23日に開館した。

b. 杉原千畝記念館（岐阜県八百津町） 図7

八百津町中心部の八百津町ファミリーセンターよりバスまたはタクシーで10分ほどの、町を眼下に一望できる人道の丘公園内の一画にあるヨーロッパ建築風外観の木造建築の博物館である。

展示室1階では、「ホロコーストってなに?」・「なぜ千畝はビザを?」・「その後の避難民たちは?」・「あなたはどんな決断をしますか?」・「杉原千畝ってどんな人?」という大テーマに沿ったパネル展示が行われている。そして、それらの中で、最初にホロコーストの歴史とユダヤ人迫害について取り上げ、千畝の仕事とユダヤ人を巡る動き、日本通過ビザ発給に至る千畝の行動、ユダヤ



図7a 杉原千畝記念館



図7b 同展示室

避難民の逃避ルートが豊富な関連写真や図表とともに解説される。さらに、救われた人と救われなかった人のその後の人生についても説明され、ビザ発給後の千畝の人生、千畝に寄せられた想い、ユダヤ人に救いの手を差し伸べた人々についても紹介される。また、杉原千畝のビザによってユダヤ避難民がたどり着いた福井県敦賀港でのエピソードも紹介されている。そして、1階奥から廊下で結ばれ独立した「決断の部屋」は、リトアニアのカウナスにあった領事館の杉原千畝の執務室を想定した展示室となっている。ここでは、杉原千畝の録音肉声や映像が視聴できるほか、執務机上でビザ発給にちなんだ記念スタンプを押印できる。また、2階には企画展示室も設けられている。

解説パネルによる展示が主で、歴史的史資料等の実物展示はほとんど行われていない。

当館は、八百津町出身の杉原千畝の人道的行為の功績を後世に伝えるために、1991年から人道の丘公園を整備し、その中心施設として生誕百年にあたる2000年7月に八百津町が設立した。

館独自の出版物としては、『愛の決断：八百津町出身の外交官 杉原千畝』（岡本 2016）などがある。

c. 人道の港敦賀ムゼウム（福井県敦賀市） 図8

JR 敦賀駅から徒歩30分、またはバスに乘車し金ヶ崎緑地バス停下車徒歩3分ほどの、敦賀港に面した緑地公園内にあるヨーロッパ建築風の独立建物である。展示室は二階に分かれ、1階は「大陸への玄関・敦賀港」、階段部分で「欧亚国際連絡列車」、主要な展示室である2階では「杉原千畝」・「ユダヤ人難民（1940～41年）」・「ポーランド孤児（1920・22年）」に関する展示が行われている。また、各展示に対応した解説シートも用意されている。

主な展示資料としては、当時のユダヤ人難民が敦賀に残した腕時計や、ウラジオストックー敦賀間の輸送船乗船者のアルバム（大迫アルバム）などである。

戦前の日本海航路でロシアのウラジオストックと直接結ばれる国際港であった敦賀は、ヨーロッパの政治情勢により二度にわたって多くの難民の上陸を受け



図8a 人道の港敦賀ミュージアム



図8b 同展示室

入れた。ロシア革命後のロシア極東・シベリア各地に取り残されたポーランド人孤児と、ナチスによるホロコーストの危機から逃れるために杉原千畝によりリトアニアのカウナスの領事館で日本通過ビザの発給を受けたユダヤ人難民である。

杉原千畝の日本通過ビザによる敦賀港上陸時のユダヤ人難民の状況と敦賀市民との交流の様相は、地元の日本海地誌調査研究会の調査成果（井上 2016, 古江 2018）によって詳しく明らかにされている³⁾。そうした地域の研究成果などがきっかけとなり、敦賀港が果たした「命」と「平和」に関する役割を伝えるために、ポーランド語で博物館を意味する「Muzeum」にちなんだ名称の当館が⁴⁾、金ヶ崎緑地無料休憩所建物を活用して2008年3月に敦賀市により設立された。

なお、難民受け入れ当時の敦賀港の中でも象徴的な建物4棟を外観復元し、そこに当館の展示を規模拡張移転し、2020年11月に新開館する予定である。

4. 考 察

日本国内におけるアウシュヴィッツ収容所に代表されるホロコーストを主題とする常設的な博物館の設立機運は、1960年代の被爆地広島で行われた市民による「広島・アウシュヴィッツ平和行進」のなかで誕生したとされる（栗山・萩原 2016：5頁）。市民が主体となって設立された福島県のアウシュヴィツ

ツ平和博物館や、被爆地と同じ広島県にあるホロコースト記念館の存在は、こうした被爆地発の平和運動・平和学習の歴史や風土の延長線上に誕生したものであり、その存在意義はとても大きい。また、常設の展示施設をもたないため本論では取り上げなかったが、展示のために所蔵資料の貸し出し等を行うNPO 法人ホロコースト教育資料センターも、同様の意義をもっている。

2004年時点で日本国内にある平和・戦争関連博物館は、合計112施設とされる（歴史教育者協議会編 2004）。それらは被爆・空襲などの戦争被害に関する例が多い。しかし、特攻作戦関連などでは、戦死者の追悼の域を超えて戦時中と同様の価値観や文言で犠牲者を美化顕彰する例も最近増えている。その反対に、大日本帝国による侵略戦争先での加害や植民地での人権侵害を扱う例は稀である。これまでの歴史学の研究成果と根本的に対立する歴史修正主義の担い手である、一部極右政治家や団体組織の圧力と自己規制により、現在の日本国内では戦時中の日本軍の加害などに焦点をあてた展示は年々困難さが増している⁴⁾。戦前・戦時中の軍国主義化に対する反戦抵抗運動や人物に焦点をあてた例が従来から非常に少ないことも、実はこうした動向の裏面を構成し、たとえばドイツやイタリアとも異なる状況といえる。このような現状は、戦後の日本国の再出発と国際社会復帰にあたっての国際公約に反する動向として強く懸念される。

そのような意味で、大日本帝国と同盟関係にあったナチス＝ドイツのホロコーストを通して、戦争の非人道性を展示の主題とする日本国内のホロコースト関連博物館には、上記の制約を超えて国際社会が共有希求する理念への回路となる普遍的な存在意義を見出すことができる。

児童・生徒にも知名度の高いアンネ＝フランク、岐阜県出身の外交官杉原千畝や長崎市住民であったマクシミリアン＝コルベ神父を主題とする博物館は、ホロコーストや全体主義の現場が現代日本と直接結びつく歴史を明らかにする。そして、それらの非人道性のみでなく、現代社会の難民・外国人労働者や差別の問題について身近に寄り添い考える機会を提供できる非常に大きな可能性を、日本国内のホロコースト関連博物館は備えているといえる。

謝 辞

小論執筆にあたり、アウシュヴィッツ平和博物館館長小淵真理氏、聖イエス会アンネのバラの教会牧師・アンネ＝フランク資料館館長坂本誠治氏、ホロコースト記念館副館長吉田明生氏、杉原千畝記念館、人道の港敦賀ムゼウムの各館より、懇切なご教示とご協力を賜りました。末筆ながら、記して御礼を申し上げます。

註

- 1) アウシュヴィッツ平和博物館創設者の青木進々氏については、以下の文献が詳しい。
山田正行編 2002『青木進々：アウシュヴィッツを生きる』、アウシュヴィッツ平和博物館建設準備室（福島）、山田正行・田中賢作編 2013『青木進々：アウシュヴィッツを伝える一篇の詩』、同時代社（東京）
- 2) ホロコースト記念館独自の多岐にわたる出版物のうち、近年の代表的書名は以下の通りである。『ホロコーストから生還したラウ少年の物語：ブッヘンバルト強制収容所生き残り最年少者 わかりやすいテキスト』（2016年）、『「暗やみに光を灯した人」杉原千畝 よくわかるテキスト：「6000人を救った命のヴィザ」世界記憶遺産登録申請中』（2017年）、『「デンマークのユダヤ人救出」：ナチスからユダヤ人を守ったデンマーク国民の勇気（1943年9月～10月）』（2017年）、『「諸国民の正義の人」：ユダヤ人を助けた救出者のお話』（2018年）
- 3) 敦賀港に上陸したユダヤ人難民の多くが一時滞在した兵庫県神戸市での状況については、新修神戸市史編集室と神戸外国人居留地研究会の岩田隆義氏により最近詳しい資料集成等が以下の文献中でまとめられ、今後の同市における関連展示などに反映されることが見込まれる。
神戸市（文書館）編 2017『神戸市史紀要 神戸の歴史』第26号（神戸開港150年記念）、新修神戸市史編集室（兵庫）
- 4) 戦時中の日本軍や植民地における非人道的行為などを展示の中心課題とし、その展示内容や博物館活動の継続に対して近年不当な圧力を受けている代表的な博物館としては、岡まさはる記念長崎平和資料館（長崎県長崎市）、女たちの戦争と平和資料館（WAM：東京都新宿区）などがあげられる。

引用・参考文献

- 青木進々編 1996『心に刻むアウシュヴィッツ：遺品・記録画・記録写真展』、株式会社グリーンピース出版会（東京）

- 青木進々・鈴木さとる訳 1985『子どもの目に映った戦争：第二次世界大戦ポーランド』, 株式会社グリーンピース出版会(東京) [Iwanicka, Katarzyna i Marek Dubas 1983 *Wojna w Oczach Dziecka*, Krajowa Agencja Wydawnicza (Warszawa)]
- 我妻英司抄訳 2001『Rescuers 勇気ある人びとの肖像展』, アウシュヴィッツ平和博物館・株式会社グリーンピース出版会(栃木) [Block, Gay and Malka Drucker 1992 *Rescuers: Portraits of Moral Courage in the Holocaust*, Holmes and Meier Publishers (New York)]
- 石岡史子・岡 裕人 2016『「ホロコーストの記憶」を歩く：過去をみつめ未来へ向かう旅ガイド』, 子どもの未来社(東京)
- 石川順子・高橋 宏訳 1996『ホロコースト全史』, 創元社(大阪) [Berenbaum, Michael 1993 *The World Must Know: The History of the Holocaust as Told in the United States Holocaust Memorial Museum*, The United States Holocaust Memorial Museum (Boston)]
- 井上 脩 2016『人道の港「敦賀港」(平成14年度 紀要創刊号抜刷)』, 日本海地誌調査研究会(福井)
- 大塚 信 2002「アンネ・フランクとホロコースト記念館」, 『アンネ・フランクのバラ：アンネの意思を受け継いだ人びと』: 152-170 頁, 株式会社出版文化社(東京・大阪)
- 大塚 信編 2013『ホロコースト記念館ガイドブック』(改訂版), ログス社(広島)
- 岡本文良 2016『愛の決断：八百津町出身の外交官杉原千敏』, 八百津町(岐阜)
- 小崎登明 1988『ながさきのコルベ神父』, 聖母文庫, 聖母の騎士社(長崎)
- 栗山 究・萩原達也 2016『アウシュヴィッツ平和博物館の実践の軌跡』, 第15回平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会特別報告②, 原発災害情報センター(福島)
- 芝 健介 2008『ホロコースト：ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』, 中公新書1943, 中央公論新社(東京)
- 杉原幸子 1996『六千人の命のビザ』(新版), 大正出版(東京)
- 高橋数樹編 2002『アンネ・フランクのバラ：アンネの意思を受け継いだ人びと』, 株式会社出版文化社(東京・大阪)
- 福島在行・岩間優希 2009「〈平和博物館研究〉に向けて：日本における平和博物館研究史とこれから」, 『立命館平和研究』別冊: 1-77 頁, 立命館大学国際平和ミュージアム(京都)
- 古江孝治 2018『人道の港敦賀：敦賀に上陸したポーランド孤児・ユダヤ人難民の命の記録』, 日本海地誌調査研究会(福井)
- 望月幸男・原田一美・井上茂子訳 1997『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』上下巻, 柏書房(東京) [R. Hilberg, 1985 *The Destruction of the European Jews*. Revised and Definitive Edition, Holmes and Meier Publishers, Inc. (New York)]
- 歴史教育者協議会編 2004『増補 平和博物館・戦争資料館ガイドブック』, 青木書店(東京)